

心理学と行動計測の展開

東北大学 名誉教授

畑山俊輝 (はたやま としひる)

心理学の研究に取り組む際に難しいのは、テーマを定めることと関連して、それにどのようにアプローチするかにあるように思う。それはアプローチする計測法が乏しいためではなく、逆にさまざまあるためにその選択に苦勞するからである。

心理学のテーマ、たとえば、認知や感情は、心臓や腎臓などの身体組織とは異なり、実体がないだけに共通理解可能な本質的定義を述べることは容易ではない。そこで、テーマの扱いにくさを克服するために導入されたのが操作的定義であったともいえよう。これにより、比較的短時間での心理機能の計測技法が種々考案されてきた経緯がある。中には、他分野への「輸出商品」にもなる優れた計測・分析技法も多い。そのため、研究の際にどの技法を採用すればよいか思案することになる。

長時間計測の場合には問題はあっという間に複雑化する。ヒトは誰もが個性的で独自であるがために、長時間記録で描かれる我々の体験や行動の一義的理解は難しい。それらの質と強度は、個人の独自の発達歴や、体験および行動を発現させる状況に対して与える意味づけや、生体リズムあるいはそのときの心的状態などの影響をより強く受ける。つまり、入力情報と脳内での情報伝達は、これら個体内の諸要因により、さらに大きく変容を受けることになるからである。このような事情から、心理学研究における行動計測は高度な専門的知識と経験が不可欠である。

この20年ほどの間のIT技術の進展はめざましい。特に脳活動の画像化技法の開発によって、心理現象と脳機能との相関を探る研究に熱い視線が向けられるようになった。この場合、脳機能の的確な検索のためには行動計測技法が欠かせない。将来的に長時間の非侵襲性記録が安定してできるようになれば、人間理解が飛躍的に進むのではないかと夢想する。また、最近のビッグデータ記録は、ヒトのマクロな行動予測にきわめて有益であることが示唆されている。

行動計測は今後ますます心理学の専門分野横断的に複雑化・精緻化していくに違いない。それに呼応して、高い心理計測技能をもつスペシャリストの養成が必要であろう。心理学の共同利用施設などの創設があってよいのではないだろうか。また、検討が継続されている公認心理師は、実務家だけでなくこのようなスペシャリストにとっても意義ある資格であることを願いたい。



Profile—畑山俊輝

1965年、東北大学文学部哲学科心理学専攻卒業。1969年、東北大学大学院文学研究科博士課程退学。博士（文学）（東北大学）。東北大学文学部助手、東北学院大学教養部助教授、東北大学文学部助教授、教授、八戸大学人間健康学部教授を歴任。専門は実験心理学、感情心理学。著書は『刺激のない世界』（分担執筆、新曜社）、『感情の社会生理心理学』（監訳、金子書房）、『感情心理学パースペクティブズ』（共編著、北大路書房）など。